

【論文】

ロンサール『論説詩集』と
ドービニエ『悲愴曲』における暴力の表象

濱 田 明

La représentation des violences dans les *Discours* de Ronsard et les *Tragiques* de d'Aubigné

Akira HAMADA

〔Résumé〕

Pour Ronsard, poète catholique, la violence des protestants iconoclastes est certes scandaleuse – et il la critique plusieurs reprises dans ses poèmes regroupés dans ses *Discours*. Mais ce qui est le plus insupportable pour lui, c'est la violence des paroles des protestants qui envahit le pays. C'est pour cela que Ronsard continue son bataille comme poète y compris après la fin de la première guerre de religion.

Pour d'Aubigné, poète protestant, la violence joue un rôle plus important dans ses *Tragiques*. La description des violences catholiques est concrète et impressionnante : torture, massacres etc. D'ailleurs, l'abondance de mentions relatives aux violences catholiques est indispensable pour rendre compréhensif et acceptable au lecteur le salut final donné par Dieu aux protestants.

キーワード：暴力、宗教戦争、偶像破壊、『論説詩集』（ロンサール）、『悲愴曲』（ドービニエ）

はじめに

フランスの宗教戦争における暴力については、デーヴィス、クルーゼなどの歴史家による研究がとくに知られているが、本論はそれらの歴史研究を参考にしつつ、時代を代表する二人の詩人、すなわちロンサールの『論説詩集』とドービニエの『悲愴曲』を、暴力の表象という視点から読み直し、宗教戦争の時代の詩と暴力の表象を明らかにしようとするものである⁽¹⁾。

もっともロンサールの『論説詩集』が、宗教戦争の初期に書かれたのに対し、ドービニエの『悲愴曲』はその大部分が宗教戦争の終結後に書かれており、またカトリックのロンサール、プロテスタントのドービニエと、二人の宗教的立場そして想定される読者も異なる。したがって、両者に共通点以上に相違点が認められて当然であり、本稿は宗教戦争の時代の詩と暴力の表象の多様性を提示するものになろう。

I. ロンサール『論説詩集』

1550年代、アンリ2世（在位1547年—1559年）の治世にあって、「平和への勧告」などロンサールは戦争と平和を主題とする作品を書いている。しかしそれらの作品では、対外戦争での武勲が英雄的な行為として賞賛されることもあった。アンリ2世が不慮の死を遂げた後、王妃カトリーヌ・ド・メディシスの子供達が相次いで王位につくが、宗教的対立に加え、王族間での権勢争いも加わり、政情は不安定になる。

第一次宗教戦争、すなわちヴァシーの虐殺（1562年3月1日）からアンボワーズの勅令（1563年3月19日）までの間、ロンサールは、「当代の惨禍を論ず」他の作品をまず小冊子（plaquette）の形で発表し、後に『総合作品集』（1567年版）の『論説詩集』のセクションまとめる。『論説詩集』は、『オード集』『恋愛詩集』『賛歌集』など幅広いジャンルの詩を手掛けたロンサールの作品の中でも、発表当時、最も広く読まれ、ロンサールの詩人としての名声を高めるものとなった。ちなみに1585年、ロンサール死去の際、デュ・ペロンが弔辞において称えた作品も『論説詩集』であった。

1. 「当代の惨禍を論ず P・ド・ロンサールによる王母への訴え」

« Discours des misères de ce temps, à la reine mère de roi. Par P. Pierre de Ronsard vandomois » と題された236行からなる詩句は、内乱によって悲惨な状況に陥ったフランスを憂い、平和へと導くよう王母カトリーヌ・ド・メディシスに訴えるものである。その執筆時期は、6月初めから6月中旬頃とされている。

この詩では、ロンサールは、まず国内に惨禍をもたらしている内乱自体を暴力とし、内乱のどちらか一方の陣営だけを非難してはいない。以下の引用は⁽²⁾、かつて外国の敵に対し自らを犠牲にして戦った過去の兵士たちの英雄的行為を想起し、彼らの視点から、自らの手でフランスを滅そうとする現在の自分達の愚かさを強調するものである。

Que diront tant de Ducs, & tant d'hommes guerriers
 Qui sont morts d'une playe au combat les premiers,
 Et pour France ont souffert tant de labeurs extremes,
 La voyant aujourd'huy destruite par nous mesmes ? (vv. 61-64)

何と言うだろうか、数多の隊長たち、戦士たちは、
 戦闘で真先に負傷して死に、
 フランスのために数知れぬ苦難に耐えたのに、
 われら自身が今日フランスを破滅させるのを見れば。

詩句はただ内乱を嘆くだけにとどまらず、この後、内乱へと到った経緯の説明を試みる。その際、ロンサールは、現実の宗教的、政治的な対立ではなく、神話を利用した説明、すなわちユピテルが宿した「人類にとってのペスト」、« Opinion » 「異説」という神話的な存在が内乱の原因であるとの説明を選択する。その「異説」はまもなく « Ce monstre » 「怪物」として、この世に次のような不幸をもたらす。

On a fait des lieux saints une horrible voerie,
 Un assassinement, & une pillerie :
 Si bien que Dieu n'est seur en sa propre maison.
 Au ciel est revollée & Justice, & Raison,
 Et en leur place hélas ! regne le brigandage,
 La force, les cousteaux, le sang & le carnage. (vv. 179-184)

聖なる場所は恐るべき塵芥捨て場や、
 暗殺の場や、略奪の場にされ、
 神は御自身の家でも安心できない始末。
 「正義」も「理性」も天に帰ってしまい、
 その跡に君臨するのは、何たることか、追剥ぎ、
 暴力、刀、血、殺戮だ。

「聖なる場所」が「略奪の場にされ」との表現が、教会財産の略奪や聖画像破壊行為など歴史家が教えるプロテスタントに特有の暴力を指しているのは確かである。しかし、ここでは、主語は不特定を示す主語人称代名詞 « On » のまま、暴力行為の主体が明確にされることはない。暴力的行為を表す名詞 « brigandage » と « carnage » で脚韻を踏み、主語と結びつく動詞を使用せず、「暴力、刀、血」と名詞中心の表現であることも注目されよう。最も重要なのは、通常の戦闘行為ではなく、「聖なる空間」が侵されていることが嘆かれている点である。

いずれにせよ、プロテスタンティズムも、「異説」という擬人的なレベルにとどまり、内乱を引き起こしている張本人とされながら、あからさまには非難はされていない。「異説」も、後に「フランス国民への訓戒」での跋扈ぶりに比べると、その振る舞いは控えめだ。

続く詩句では、「異説」から離れ、改めてフランス全土が戦場となっていることを嘆いた後、直接、王母に呼びかける。

Ainsi la France court en armes divisée,
 Depuis que la raison n'est plus autorisée.
 Mais vous, Roïne tressage, en voyant ce discord
 Pouvez, en commandant, les mettre tous d'accord : (vv. 195-198)

理性がもはや権威の裏づけを失ってから、
 フランスは互いに武器をかざして突っ走る。

けれども、このうえなく賢明な王母さまは、この不和をごらんになり、
 命令を下して、全員を和解させることができます。

王母に「惨禍」を収めることを訴え、その手腕への期待を示している。この詩は、このように、ロンサールの愛国的かつ宮廷詩人としての立場が鮮明に打ち出された作品と言えよう。

2. 「続・当代の惨禍を論ず P・ド・ロンサールによる王母への訴え」

ロンサールが詩句に託した願いも空しく、その後も内乱は収まることなく、プロテスタントのコンデ公はル・アールと引き換えにエリザベス女王へ援助を求める。内乱の激化に伴い、10月頃に執筆された « Continuation du discours des misères de ce temps, à la reine mère de roi » は、前作とその内容、調子が大きく変化することになる。タイトルは「続」とあり、引き続き「王母へ」へ捧げられているものの、王母に語りかける箇所は、冒頭の8行のみにとどまり、王母へ呼びかけ、その後フランスの惨禍を嘆き、最後に再び王母へ訴えるという形式は放棄される。そして、ロンサールの詩句は、内乱の当事者たち、とりわけプロテスタントへ向けられることとなり、詩行も448行と前作の倍以上となっている。

王母への呼びかけの直後に、フランスは「旅の途中で泥棒に会う商人」に喩えられ、その「泥棒」と言えば、盗むだけでなく、「商人」を襲い、拷問にかけ、傷を負わせる。このように、前作と異なり、暴力行為の加害者と被害者の関係が最初から明確にされている。

そしてフランスがもはやカトリックとプロテスタントの両方をその中に合わせ持つてはいないことが続く詩句で判明する。すなわち、「新たな暴君たち」« ces nouveaux Tyrans » がフランスを襲うと続ける時、その暴君たちが指すのは、プロテスタントに他ならない。確かに、プロテスタンティズムはまずドイツのルターによって唱えられ、フランス語圏のプロテスタント勢力の中心はカルヴァンが逃れたジュネーブであった。しかし、内乱の中心は、フランス国内のプロテスタント勢力と貴族たちであったことは言うまでもない。フランスの王権以上に、自分達の信仰に重きを置く彼らをロンサールは、フランスの王に従わない、「新たな暴君たち」として、フランスの外部の存在として捉えているのだ。そして興味深いのは、聖像図破壊が、前作とは全く異なる調子でプロテスタントの暴力的な行為として明示されている点である。

Or eux se vantant seuls les vrais enfans de Dieu,
 En la dextre ont le glaive, & en l'autre le feu
 Et comme furieux qui frappent & enragent,
 Vellent les temples saints, & les villes sacagent.
 En quoy ! bruler maisons, piller & brigander,
 Tuer, assassiner, par force commander,
 N'obéir plus aux Rois, amasser des armées,
 Appellez-vous cela Eglises reformés ? (vv. 41-48)

さて、彼らは自分だけが神の真の子供なりと自惚れつつ、
 右手に剣を、左手に銃を持ち、
 まるで発作に襲われ荒れ狂う狂人のように
 聖なる教会で盗みを働き、町々を荒らす。
 また何たることか！ 家を焼き、略奪し、強奪し、
 殺害し、暗殺し、力づくで命令し、
 王にはもはや服従せず、軍隊を集めることを、
 おまへたちは改革教会と呼ぶのか。

引用の最初の詩節では、「新たな暴君たち」を指す三人称複数形の主語は、「自惚れる」「狂人のように」と否定的に形容された後、「教会で盗みを働き、町々を荒らす」と、暴力行為を加える主体となっている。次の詩節の、「焼く、略奪する、強奪する、殺害する、暗殺する」との不定詞を畳み掛ける表現によって、暴力行為そのもの自体が明確に示される。そして引用の最後の詩行では、暴力の主体であるプロテスタントに対し、それまでの三人称から、「おまえたちは」と二人称で直接的に呼びかける。そして「改革教会」という彼らの名称の正当性への疑いは、プロテスタントたちの言葉と実体の解離、その偽善へと向けられる。いずれにせよ、前作から引用した箇所とほぼ同じ暴力的行為である偶像破壊について、ここではプロテスタントの蛮行として非難していることが注目に値する。

この詩句の後、「おまえたち」と、プロテスタントに対し、彼らの犯した悪行を強い調子で非難した後、プロテスタントの指導者かつロンサール自身と親交もあるド・ベーズへは、友情を交えつつ、カトリックへの回帰を呼び掛ける。しかし続く、プロテスタントの「二人の監督者」に対しては再び調子を変え、論争的な問答を導入する。本論の議論を超えるが、ロンサールのこの詩でのこれらの論争的な語りこそが、後にプロテスタント詩人たちからの反論を呼ぶことになるのだ⁽³⁾。

また、次の引用では、擬人化した「フランス」が、長い嘆きの中で、先ほどと同じようなプロテスタントの偶像破壊を嘆いている。

Ils n'ont pas seulement, sacrileges nouveaux,
Fait de mes temples saints, estables à chevaux,
Mais comme tormentés des Fureurs Stygiales.
Ont violé l'honneur des ombres sepulchrales,
A fin que par tel acte inique & malheureux
Les vivants & les morts conspirassent contre eux : (vv. 385-390)

彼らは私の聖なる諸教会堂を、
新たな冒瀆よ、馬小屋に変えたばかりか、
地獄の狂気に駆り立てられているかのように、
聖なる墓に眠る亡霊の名誉を犯した。
かかる邪悪で不幸な行為により、
生者も死者も彼らに謀反を企てるのは避けられない。

ロンサールが繰り返し非難するプロテスタントの偶像破壊については、プロテスタントの立場からは以下のような反論がありえよう。神の言葉と関係のない聖図画像に満たされたカトリックの「聖なる緒教会堂」などむしろ穢れたものであり、「馬小屋」として利用してなぜ悪いのか。実際、プロテスタントはかつてのカトリックの教会より、むしろ納屋や市場の建物を祈りの場として利用したという。また、「聖なる墓に眠る亡霊の名誉を犯した」と言うが、虚飾に満ちた豪華な墓に納まり、聖遺物として崇拜されようとするからこそ、神に背く行為ではないかとプロテスタントは考えるのである。

3. 「フランス国民への訓戒」« Remontrance au Peuple de France »

内乱の状況はますます混沌とし、12月にはコンデ公によってパリが包囲される。この作品に至り、

タイトルから王母が消える。もはや王母に託すのではなく、ロンサール自身がプロテスタントやカトリックの両陣営、王侯たち、高位聖職者、裁判官、貴族といったフランスの国民に広く訓戒を与える形をとる。この作品については、暴力の表象に触れる前に、2点指摘しておきたい。

まず、「当代の惨禍を論ず」では神話的な比喩で表現されていた「異説」が、この作品では大きく扱われている点。ローマのカトリック教会批判などを激しく展開し、怪物としての邪悪さを増し、最終的には蛇となってルターの体に入る「異説」は、神話的な要素を残しつつ、同時代史とより明確な関係を持つ存在となっている。

次に、プロテスタンティズムについてロンサールの個人的な体験が書かれている点。一般論としてではなく、かつてプロテスタントの教えを「味わった」人間として、プロテスタントを十分に理解した上で非難しているのだという論法を立てる。

暴力についても、内乱で銃弾を受け、負傷したと、個人的な体験と結びついた形で語る。それらの身体的な暴力については、繰り返し「死ぬことは怖くない」と述べる。では、「死ぬ思いだ」とそれ以上に耐えられないとロンサールとするのは何か。

Je meurs quand je les voy enflés de vanteries,
Semant de toutes pars cent mille menteries,
Et deguiser le vray par telle autorité
Que le faux controuvé semble estre verité,
Puis resserrer l'épaule, et dire qu'ils depleurent
Le malheur de la guerre, et de ceux qui y meurent,
Assurans pour la fin que le grand Dieu des cieux
Les fera, quoy qu'il tarde, icy victorieux. (vv. 559-566)

私は死ぬ思いだ、彼らが自信たっぷり、
いたる所で無数の嘘の種を撒きながら、
この上ない権威で真実を偽るために、
捏造した偽りが真実に見えるほどで、
それに、肩をすぼめて、戦争と
戦争で死んだ人々の不幸を嘆き、
究極的には天にいます偉大なる神が、
遅ればせながら、今にも彼らを勝利者にする、と請け合うのを見ると。

ロンサールが「死ぬ思いだ」とするのは、暴力的な行為やではなく、「自信たっぷり」「無数の嘘の種をまきながら」、彼らの「偽りが真実に見えるほど」であることなのだ。身体的な暴力以上に、耐えられないのは、プロテスタントの偽りに満ちた言説なのだ。

そして引用部分の後半で、宗教戦争の犠牲者であるプロテスタントたちが「戦争で死んだ人々の不幸」を「嘆き」、プロテスタントが自分達の究極的な勝利を「請合う」ことに怒りをぶつける。戦死という戦争における暴力それ自体より、ロンサールが問題とするのは、プロテスタントの言説の力であり、それを暴力とロンサールは捉えているのだ。

ちなみに、ロンサールは、第一次宗教戦争が始まる2年前の1560年に発表した「ギヨーム・デ・ゾテルへのエレジー」において既に、「書物による戦い」においてプロテスタントに後れを取っていることの危機感を表明している⁽⁴⁾。そこには、国王シャルル9世の信任も厚い宮廷詩人として、フランスの文化の担い手である自身の言説に対する自負と、それを認めない者たちへの強烈な対抗心を読み取ることが出来よう。

1563年3月19日、アンボワーズの王令により第一次宗教戦争は終り、時局の要請によって作品を発表する必要はなくなる。しかし戦争の暴力が止んだ後も、プロテスタントの言説の暴力を批判するロンサールの詩句がプロテスタントの反感を呼び、ロンサールとプロテスタントの詩人達の論争が本格的に始まることになる。

以上、ロンサールの『論説詩集』に収められた詩作品における暴力の表象を整理すると、戦争の暴力から、偶像崇拜などプロテスタトの暴力への非難の変化が見られること、さらにはプロテスタントの言説を言葉の暴力と捉え、それに対する嫌悪感、反発などがその特徴であると言えよう。

Ⅱ ドービニエ『悲愴曲』

『悲愴曲』（初版1616年）は作品のジャンル、典拠、構成、文体などさまざまな要素が複雑かつ大きなスケールで展開する作品であるが、プロテスタントの迫害と神による救済、そしてプロテスタントを迫害した者に対する神の復讐が明確に主張されている。

作品は序詩に続く、「悲惨」「王侯」「黄金の間」「火刑」「剣」「復讐」「審判」の七つの書で構成されている。暴力という視点からこの七つの書を見る場合、第一の「悲惨」では戦争、第四の書「火刑」では異端審問、第五の書「剣」では戦争、とくにヴァシーや聖バルテルミーなどの虐殺が分析に値しよう。

1. 「悲惨」

「悲惨」の書は、眠っていた悲劇の女神が戦場の叫び声によって目を覚まし、内乱で荒廃するフランスを見るという神話的な冒頭に続き、擬人化された女性であるフランスが不幸を嘆く場面へと移る。「misères」「悲惨」というタイトルだけではなく、擬人化されたフランスが登場する点も、ロンサールの「続・当代の惨禍を嘆く」と同様である。しかし、ここでは傷つくフランスだけでなく、二人の子供の姿も描かれる。二人の子供は、旧約聖書創世記のエサウとヤコブとされ、兄エサウことカトリックに対し、弟ヤコブであるプロテスタントの正当性が主張される。そして以下のように、二人の子供の争いのために母親であるフランスが死にゆく姿が具体的に描写される点でもロンサールと異なる。

Adonc se perd le laict, le suc de sa poitrine,
 Puis aux derniers aboys de sa proche ruine
 Elle dit, vous avez felons ensanglanté
 Le sein qui vous nourrit et qui vous a porté :
 Or vivez de venin, sanglante geniture
 Je n'ay plus que du sang pour vostre nourriture⁽⁵⁾. (I. vv. 125-130)

そのため、母親の胸から乳は失われてしまう。
 それから、破滅へ向かう最後の時に
 彼女は言う、「親に逆らうばかりのあなたたち
 ふたりを宿し育んだ胸を、自分たちで血に染めたのよ。
 今からは毒を飲み生きなさい、血にまみれた子供たち
 もう血しかないわ、あなたたちが口にするのは。」

このように擬人化されたフランスの語りに次いで、戦争の愚かさを一般的に語った後、「私の目が私の詩句の主題の証人なのだから」« Car mes yeux sont tesmoins du sujet de mes vers. » (I. vv. 371) と、戦争の具体的な光景を語る。次に引用する箇所少し前では、アングレーム近くの村の具体的な地名（モンモロー）に言及している。場面は、第三次宗教戦争中の1569年夏、ジャルナックでの戦闘の前に、援軍としてドイツ兵がコリニー提督の部隊と合流のため移動していた時のこととされる。従って、以下の惨劇を引き起こしたのはドイツ兵であっても、ドービニエと同じプロテスタント側で戦っていた兵士である。彼らが去った後、ドービニエは次のような光景を目撃する。

Là de mille maisons, on ne trouva que feux,
 Que charognes, que morts, ou visages affreux :
 La faim va devant moi, force est que je la suive :
 J'oy d'un gosier mourant une voix demi-vive,
 Le cry me sert de guide, et faict voir à l'insant
 D'un homme demi-mort le chef se debattant,
 Qui sur le sueil d'un huis dissipoit sa cervelle,
 Ce demi-vif la mort à son secours appelle
 De sa mourante voix, cet esprit demi-mort
 Disoit en son patois (langue de Perigort)
 Si vous êtes François, François je vous adjure,
 Donnez secours de mort, c'est l'aide la plus seur
 Que j'espere de vous, le moien de guerir : (I. vv. 379-391)
 (...)
 Atant ell' approcha sa teste du berceau,
 La releva dessus, il ne sortoit plus d'eau
 De ses yeux consumez, de ses playes mortelles,
 Le sang mouilloit l'enfant, point de laict aux mamelles :
 Mais des peaux sans humeur : ce corps seché, retraits,
 De la France qui meurt fut un autre pourtraict : (I. vv. 419-424)

そこでは、家々はことごとく火に包まれ
 腐った死体、恐ろしげな顔の死者ばかり。

待つのは飢えだけ、だが私も進まねばならない。
 聞こえる、死に行く者の喉から洩れる、微かな声が。
 その唸り声に導かれて、すぐに目にしたのは
 瀕死の男が頭をのたうち回しながら
 戸口の敷居の上に脳味噌を撒き散らすさま。
 この瀕死の男が救いとして求めるのは死
 消え入る声で今際の極みに、ペリゴール地方の言葉で
 次のように語るのだった。

「もしフランスの方なら、フランスの方よ、お願いです
 助けるとして殺して下さい。それが最も確かな助け
 もっとも私を癒してくれる方法なのです。」

(…)

その時、母親は、寝台に顔を近づけ、上げた。
 母親の乾いた目から、もはや涙は流れていなかった。
 子供を濡らしていたのは、乳房に溢れる乳ではなく
 死に至らしめた傷からの血だった。
 しかし、この乾いた肌、干からび縮んだこの体は
 死に行くもう一つのフランスの姿なのだ。

ここでは、「フランスの方なら」と宗教や党派より、方言であってもフランス語という同じ言葉によって、瀕死の状況で自分の思いを伝えることに重点が置かれている。

語り手が目撃し、耳にするのは、具体的で凄惨極まりない光景である。また、惨劇は犠牲者である瀕死の農民の直接の証言という形で述べられる。これらにより、暴力の現実性は高められている。しかし同時に、兵士として農民の声を聞く語り手は、胸から乳ではなく血を流す母を、「もうひとつのフランスの姿」と表現する。戦火の情景を擬人化されたフランスにつなげることにより、この書の冒頭での神話的な表現と一貫性を与えていよう。

なお、この描写の激しさ、言葉の調子の激しさを、一定の段階で抑制する意識は他の箇所にも見られる。第2の書「王侯」では、第1の書「悲惨」で描かれた内乱を招いた原因、その張本人として、カトリーヌ・ド・メディシスとその息子たちが名指しされ、とくにアンリ三世を槍玉に、辛辣な風刺が長く繰り広げられる。宮廷詩人であったロンサールと異なり、ドービニエにとって、ヴァロア王朝の王たちは、統治能力を失った暴君に過ぎない。女装して踊るアンリ三世の姿を描くなど、鋭い風刺を展開する一方、「風刺詩にまかせよう」と自分の筆が流れることに対して、自制する意識が見て取れる。

Triste, je trancheray ce tragique discours
 Pour laisser aux pasquils ces effroyables contes,
 Honteuses veritez, trop veritables hontes. (II. vv. 1058-1060)
 悲しや、この悲劇的な言葉を止めよう、

身の毛のよだつ話は、風刺詩にまかせよう、
恥ずべき真実、この上なく真に恥ずかしいことは。

ただし、そのように断ること自体、自分の筆の鋭さ、激しさが、許容される限界に近いことを認識していることを示すものとも言えよう。

2. 「火刑」

「火刑」は、7つ書の真ん中の4番目に位置しているだけでなく、火刑による殉教者に捧げられていることにより、重要な書と言える。なぜなら、信仰のために命を捧げた殉教者こそが、神に祝福されるべき存在であるからだ。この書での暴力は、牢獄での拷問、処刑人 « bourreau » によるもので、彼らの残酷さは、暴力に耐える殉教者の姿と対照的に示されている。また不正な法ゆえに、執行官、異端審問官が圧倒的に優位に立ち、暴力の加害者と被害者という関係でありながら、ドービニエの詩句にあっては、両者の立場は逆転し、崇高な殉教者こそが優れた立場に立つ。ちなみに「彼女」とは、1546年、火刑に処されたアンヌ・アシュケープである。牢獄からの手紙がクレスパンの『殉教記』に収録されている。拷問によく耐え、また彼女とともに処刑された3人（『悲愴曲』では4人であるが）も、その励ましによって、勇気を得たと言う。

Le juge se despote, et luy mesme retend
La corde à double nœud, il met à part sa robe :
L'inquisiteur le suit, la passion des robes
La pitié de leurs yeux : ils viennent remonter
La gehenne, tourmentez, en voulant tourmenter :
Ils dissipent les os, les tendons, et les veines,
Mais ils ne touchent point à l'ame par les gehennes : (IV, vv. 172-178)
(...)
Quatre martyrs trembloient au nom mesme du feu,
Elle leur departit des presents de son Dieu,
Avec son ame encor elle mena ces ames
Pour du feu de sa foy vaincre les autres flammes.
Où est ton aiguillon ? où est ce grand effort ?
O mort, où est ton bras ? (disoit elle à la mort)
Où est ton front hideux duquel tu espouvantes
Les hures des sangliers : les bestes ravissantes ? (IV, vv. 191-198)

執行官は走り寄り、自らの手でもう一度
綱を二重に縛ると、服を脱いだ。
異端審問官もそれに倣うが、彼らの目には
感情も憐れみもない。彼女を苦しめようと、

拷問の器具を引き上げに来ては、自分たちが苦しむ始末。
 彼らは骨を、髓を、そして血管も砕くが、
 拷問によって魂まで触れることはない。

(…)

四人の殉教者たちが火という言葉に震えていると
 彼女は神からの贈り物を彼らに分かち与える
 信仰の火で、他の炎に打ち勝つため
 自分の魂と一緒に、彼女はこの者たちの魂も運んだ。
 「どこにある、おまえの棘は、大きな力は。おお死よ
 おまえの腕はどこにある。(と彼女は死に向かい言った)
 林を荒らす獣、猪の頭を恐れさせた
 おまえの恐ろしげな額はどこにあるのか。」

暴力を加える者の残酷さを強調することで、暴力を受ける者の信仰の正しさ、信仰の強さがいや増す。暴力といっても、拷問は、単に肉体を破壊することを目的にしているのではない。「骨を、髓を、そして血管も砕く」のは、苦しみを与えることによって、「魂に触れ」、その精神を支配することが目的なのだ。その目的は果たせない。それにとどまらず、処刑の前にして、殉教者は、言葉を発することによって、邪悪な死刑執行人を前に、自身の完全な正しさを示す機会を得るのだ⁽⁶⁾。

殉教は、民衆の衝動的な暴力や、兵士たちの武器による暴力ではなく、プロテスタントの信じる神を否定する、不正な法に則り行われるものである。たとえ不正ではあっても、法に従って殺されることによって、彼らは偶然の死者ではなく、神による救済が約束された殉教者となることが可能になる。それゆえ彼らにとって死は幸福を約束するものになったのだ。

3. 「剣」

この書は、宗教戦争や聖バルテミーの虐殺を背景とすることから、暴力的な描写に富む。しかし、初めに確認しておきたいのは、冒頭部分での神と悪魔の対話を受け、これらの情景が、「天上画」、すなわち地上の光景そのものではなく、天使たちの手によって天上に描かれて神に示されるとされている点である。これにより、地上における戦争、虐殺の残酷なシーンを描きながら、暴力行為の描写自体が目的となることはなく、その情景が天上で神の目に触れることにより、最後の審判を促す働きを持つことになる。

アンボワーズの騒擾（1560年）、第一次宗教戦争のドリューの戦闘（1562年12月19日）、第二次宗教戦争のプロテスタントによるパリの包囲戦（1567年10月）、そしてモンモランシー元帥のサンドニの戦闘での死（1567年11月）など、宗教戦争の様々な局面が描かれている。しかし戦闘行為の場合、宗教的な救済に向けて、プロテスタントだけが特権的な扱いを受けるわけにはいかない。

手法に注目すると、新たに戦闘が言及される場合は、「こちらの新しい絵では」と、天上画という空間を読者に注意を喚起する形で描かれている。宗教戦争のさまざまな局面は必ずしも時系列的に配置されてはいない。むしろ、戦闘行為は絵画のように、並べられ語られている。それゆえ、第一次宗教戦争の端緒とされているヴァシーの虐殺が語られるのは、第二次宗教戦争を扱った箇所の後、545

行目以降なのである。1560年3月1日、カトリック強硬派のギーズ公の一軍がシャンパーニュ地方のヴァシーを通りがかった際、プロテスタントの礼拝が行われている場面に遭遇する。1月の王令により、プロテスタントの集会は城壁外との条件付で認められていた。虐殺のきっかけとなったのは、礼拝の場所を偵察に来たギーズの兵士が襲われたためとする説もあるが、詳細については不明な点が残る。ドービニエは虐殺の場面を以下のように語る。

On void au bout d'un rang une troupe fidelle
 Qui oppose à la peur la pieté, le zelle,
 Qui au nez de Satan voulant louer son Dieu
 Sacrifie en chantant sa vie au triste lieu
 Où la bande meurtrière arrive impitoyable,
 Farouche de regards, et d'armes effroyable,
 Deschire le troupeau, qui, humble ne deffend
 Sa vie que de cris : l'un perce, l'autre fend
 L'estomach et le cœur, et les mains, et les testes
 Qui n'ont fer que le pleur, ni boucliers que requestes : (V, vv.545-554)

天上画の端に見えるのは、信者たちの群れ
 信心と熱意で恐怖に立ち向かい
 サタンの鼻先で神を讃えようとし
 歌いながら、命を捧げるのだ、この悲しい場所に。
 そこにやって来る、情け容赦なく、目つきも険しく
 武器を手にした凶暴な殺人者の集団が。
 信者の群れを引き裂くと、抗うことのない信者に
 命を守る術は、ただ叫び声のみ。
 ある者は突き刺し、切り裂く、腹を、胸を、手を、頭を
 剣なき信者には涙、盾なき彼らにはただ祈りの声のみ。

この虐殺の場面では、丸腰の民衆を襲うギーズ家の兵士たちの残虐さが強調されている。彼らは、武勲の誉れ高い軍人とは程遠い、「凶暴な殺人者の集団」に過ぎない。殺される側に目を向けると、信者の集団が「神を讃えて歌う」とは、マロ、そしてド・ベーズによりフランス語訳された詩篇であろう。しかし、プロテスタントの歌声は、武器を片手に襲い掛かる兵士の暴力的行為によって、「叫び声」へと変わる。刑の執行直前、声高らかに自らの思いを述べ、その名と信仰心を後の世にまで伝えた殉教者と異なり、虐殺という暴力にあっては、自らの思いを告げる言葉を失い、彼らは主体であることを禁じられる。その身体も、暴力を受ける身体、剣が突き通される「腹、胸、手」として存在するだけだ。そして、その身体は切り刻まれ、ばらばらになってしまう。

殉教者を火刑にするのは、火の力によって、異端の穢れをこの世から消し去ろうとするためであるが、殉教者の身体は燃やされた後、灰となる。「火刑」の書では、殉教者の灰が飛散し、地に落ちては種子となり、自然に恵みをもたらすととの解釈が提示される⁽⁷⁾。一方、ここで虐殺された死体は、切

り刻まれ、身体の各部分も、体と切り離されることによって機能を失い、新たな生命を得ることなく、単なる切れ端となるばかりだ。

『悲愴曲』にとどまらず、恋愛詩を含めたドービニエの詩句において、「血」が特権的な意味を担うことは既に指摘されている⁽⁸⁾。血は生命の象徴でもあり、流れ出す血は死への予兆である。水の清らかさに対して、穢れの象徴にもなる。この「剣」の書でも、1572年8月のパリの聖バルテルミーの虐殺の後、セヌ川に血が流れ込み、血と水が混じり凝固する箇所は、虐殺の残酷さを伝える有名な箇所である。

それだけにはとどまらない。切り刻まれ、かつての姿や形を失くしてしまう他の部位と異なり、形なき血は、身体から流れ出た後も血であり続ける。そして、犠牲者の血は、他の犠牲者の血と混じりあう。以下の引用は、川に捨てられた死体が流され海に達しようとする時、「大洋の神」が異変に気づき、憤慨する箇所である。

Il trouva cas nouveau, lorsque son poil tout blanc
 Ensanglanta sa main : puis voyant à son flanc
 Que l'onde refuiant laissoit sa peau rougie :
 A moy :(dit-il) à moi, pour me charger d'envie,
 A moy : qui dans mon sein ne souffre point les morts,
 La charogne, l'ordure, ains la jette à mes bords : (V, vv.1487-1492)
 彼（大洋の神）は奇異に思う、真っ白なはずの自分の髪が
 その手を血で染め、また脇腹をかすめた引き潮が
 肌を赤く染めるのを見て。
 「このわしに、こんなことを、（と大洋の神は言う）
 わしに憎しみを向けおって、死者、腐肉や塵芥など
 この胸に受け入れられようか、いや岸辺に捨てるのだ」

大洋の神の白髪は高齢だけではなく、海の清らかも意味しており、ここでの血は、穢れに他ならない。しかし、しばらくすると、大洋の神は、天から天使が舞い降りてくるのを目にする。

(...) ayants en main des coupes
 De precieux rubis, qui plongez dedans l'eau,
 En chantant rapportoient quelque present nouveau,
 Ces messagers aislez, ces anges de lumiere
 Trioient le sang meurtry d'avec l'onde meurtriere
 Dans leurs vases remplis qui prenoient, heureux, lieu
 Aux plus beaux cabinets du palais du grand Dieu : (V, vv.1502-1508)
 (略) 天使たちは尊きルビーの杯を手に、水の中に入り
 歌いながら、何か新奇な贈り物を運んできていた。
 翼をつけた御使い、これらの光の天使たちは

大きな杯の中で、殺された者の血と命を奪う波を選び分けていた。
 血に満たされた杯は幸いなことに
 偉大な神の宮殿の美しい小部屋の中に場所を得るのだ。

大洋の神も、天使との対話により、信仰ゆえの犠牲者の血であったことを知ると、「幸いなる子らを、神が（最後の審判の日の）幸福へと返すその時まで」受け入れると告げる。このように、殉教者と異なり、個人として言葉もなく、身体も失った虐殺の犠牲者にとって、血は信仰ゆえの死であったことを知らせる貴重な証となったのだ。

ドービニエの『悲愴曲』については、これまで見てきたように、暴力の描写は迫真的であった。また、暴力行為よりは暴力の加害者と被害者、特に暴力を受ける側であるプロテスタント側に焦点があてられることが多いのも特徴と言えよう。しかしながら、兵士の残虐な行為、異端審問官の拷問、虐殺の犠牲者の死体の描写などについても、単に残酷なイメージを積み重ねるような描写に終わることはなかった。『悲愴曲』における暴力は、神による救済へと向かわせる力でもあったのである。

結びにかえて

ロンサールの「当代の惨禍を論ず」など『論説詩集』を構成する一連の作品については、宗教戦争の暴力は不可欠な要素ではあるものの、興味深いのは、むしろ詩人の立場の変化、語る行為の変化であった。まず「当代の惨禍を論ず」では、国を荒廃する戦争の悲惨さを嘆き、宮廷詩人として愛国的な立場を取るが、続く「続・当代の惨禍を論ず」「フランス国民への訓戒」において、ロンサールはプロテスタントへの批判を強めてゆく。その際、プロテスタントの偶像破壊は、プロテスタントの暴力行為として非難される。しかし、『論説詩集』を通して読むとき、ロンサールが、プロテスタントの残酷な行為以上に、蔓延するプロテスタントの言説を暴力として捉えていることが窺える。

一方プロテスタントの軍人として、戦場も経験し、一生をプロテスタントのために戦ったドービニエにとって、暴力は、彼の歴史家、風刺作家、詩人としての活動にとって、現実そのものであった。特に『悲愴曲』においては、聖バルテルミーの虐殺などカトリックの暴力は、プロテスタントへの迫害の中核を構成するものであり、ロンサールの詩句に比べて、暴力行為に関するはるかに残酷で、生々しい描写が多く見られる。一方で、『悲愴曲』は、迫害を受けたプロテスタントを最後の審判により救済を意図している。神の怒りが向けられるカトリックの暴力、不正自体が、プロテスタントの存在意義を担保する不可欠な要素となっており、それゆえ、この作品において暴力が果たす役割が極めて重要となっているのである。

注

- (1) 本稿は、科研費（22520319）の助成を受けたものである。また本稿は、2011年10月8日小樽商科大学で開催された日本フランス語フランス文学会2011年度秋季大会ワークショップ「フランス・ルネサンス文学に見る暴力の表象とその周辺」における発表をもとにしており、論証より分析を主としたものになっている。ワークショップでは、平野隆文氏（立教大学）と久保田剛史氏（青山学院大

- 学) がラプレー、モンテーニュなどの散文、筆者が詩における暴力について発表した。デーヴィスとクルーゼの研究では、ナタリー・Z・デーヴィス『愚者の王国 異国の都市』平凡社1987年(特に第6章「暴力儀礼」、Denis Crouzet, *Les Guerres de Dieu*, Champ Vallon, 1990などが、宗教戦争時代の暴力について詳しい。ロンサールの政治的な詩についての代表的な研究書としては、Daniel Ménager, *Ronsard. Le roi, le poète et les hommes*, Genève, Droz, 1979が挙げられる。2009年に「当代の惨禍を論ず」が高等教授資格試験の課題となったこともあり、Véronique Ferrer, Frank Lestringant, Alexandre Tarrête, *Sur les discours des misères de ce temps de Ronsard*, Paradigme, 2009 他、関係する論文、研究書の出版が相次いだ。本書の執筆にあたり、一般的な記述はこれらに多くを負っている。
- (2) ロンサールの引用は、次の版により、論文本文中では、詩行数を記すにとどめる。Ronsard, *Œuvres complètes*, éd. Paul Laumonier, Paris, S.T.F.M. TomeXI. 2009. ヒグマンによる以下の版の序文、注釈も参考にした。Ronsard, *Discours des misères de ce temps*, éd. Francis Higman, Paris, Le Livre de Poche Classique, 1993. なお、和訳は断わらない限り、高田勇『ロンサール詩集』青土社1985年を使用した。
- (3) 盛んに書かれたプロテスタント側の論争詩は以下にまとめられている。Jacques Pineaux, *La polémique protestante contre Ronsard*, Paris, Didier, 1973, 2 tomes.
- (4) Ronsard, *Œuvres complètes*, éd. Paul Laumonier, Paris, S.T.F.M. TomeX.1973, p.350. « Élégie à G.Des Autel gentil homme chalolais », vv.15-22. (拙訳)「今やわれらの家々を守らねばならぬ/切り裂く剣ではなく、澁刺とした理性によって/そして勇敢に、われらの敵を打ち倒さねばならぬ/われらを打ち倒そうとする同じ棒で。/敵が書物によって、誤って敵に従い/道を外れた民を惑わしたように/書物によって、敵と争い、やり込め/書物によって、敵を襲い、書物によって敵に應えなければならぬ。」
- (5) ドービニエの引用は、次の版により、論文本文中はローマ数字で書の数を、アラビア数字で詩行数を記す。Agrippa d'Aubigné, *Les Tragiques*, éd. Raymond Fanlo, Paris, Champoin, 2003. なお訳は筆者による。
- (6) ドービニエにおける殉教については、以下の書に詳しい。Frank Lestringant, *Lumière des martyrs*, Paris, Honoré Champion, 2004.
- (7) 濱田明「ドービニエの『悲愴曲』における墓」『フランス文学論集』九州フランス文学会45号2010年pp.21-34. なお以下の記述について、上記論文と一部重なる部分があることをお断りしておく。
- (8) Gisèle-Mathieu Castellani, « Violences d'Aubigné », *Poétiques d'Aubigné*, publiés par Olivier Pot, Genève, Droz, 1999, pp.17-31. この論文は、『悲愴曲』だけではなく、ドービニエにおける暴力について論じたものである。